

第 1 回ドイツ語作文・翻訳コンテスト 翻訳・独文和訳（独検準 1 級程度）

課題

Trotz aller Begeisterung hatte Kennedy Sorgen. Ihm gefiel die Rede nicht, die er vor den Berlinern am Schöneberger Rathaus halten sollte . (...)

Kennedy hatte darauf bestanden, dass die Rede auch einige Worte in deutscher Sprache enthalten sollte. Assistenten hatten zunächst bei Goethe gegraben und waren mit einer Faust-Sentenz fündig geworden: "Das ist der Weisheit letzter Schluss: Nur der verdient sich Freiheit wie das Leben, der täglich sie erobern muss." Die wurde allerdings schnell wieder gestrichen, der brillante Redner Kennedy zeigte sich fremdsprachlich wenig gewandt . (...)

Auf dem Flug nach Berlin zeigte Kennedy das Manuskript dem amerikanischen Stadtkommandanten James Polk, der es mit dem Kommentar "furchtbar" wieder zurückgab. Dann, offenbar unter dem Eindruck der jubelnden Berliner, entschloss sich Kennedy, die Rede umzuschmeißen. Er warf alle Ausgewogenheit über Bord und gab den Berlinern, was sie hören wollten.

Es war ein Rückfall in die klassische Rhetorik des Kalten Kriegs. "Es gibt Leute, die sagen, dem Kommunismus gehöre die Zukunft. Lasst sie nach Berlin kommen." (...)

Gleich am Anfang aber und ganz am Ende der Rede fiel der Satz, mit dem er in die Geschichte eingegangen ist: So wie in der Antike ein Mensch stolz war, ein Bürger Roms zu sein, könne heutzutage jeder freie Bürger der westlichen Welt von sich sagen: "Ich bin ein Bearleener".

Hans Hoyng: „sim-BOWL fear dee GANTSA VELT“, *Der Spiegel*, 24/2013, S. 80/81

最優秀賞 明石 真維様

熱狂的な歓迎を受けながらもなおケネディには気にかかることがあった。シェーネベルク市庁舎前で行う予定の演説にまだ納得がいていなかったのだ。

演説にはドイツ語のフレーズも入れてほしいとケネディは訴えた。アシスタントはまずゲーテの著作をあたり、ファウストからある一節を引用した。「人知の至りつくところはこうだ。自由と生活を日々闘い取らねばならぬ者こそが、それを享受するに値する」。しかしこれはまもなく削除された。優秀な演説家であるケネディも、外国語はあまり得意ではなかったからだ。

ベルリンに向かう機内で、ケネディは原稿をアメリカ人のベルリン司令官ジェームズ・ポークに見せたが、「酷い」という言葉とともに突き返されてしまった。そこでケネディは一歓喜するベルリン市民に感銘を受けてのことであろうが、演説を一から練り直すことを決意した。各方面へ配慮した表現をやめ、ベルリン市民の期待に言葉で応えることにしたのだ。

冷戦時代の典型といえるレトリックへの回帰であった。「未来は共産主義のものと
言う人たちがいる。彼らをここベルリンに連れてこようではないか」。

ケネディがこの演説の冒頭と最後に放った言葉は、彼の名を歴史に刻み込むことになった。古代の人々がローマ市民であることに誇りを持っていたように、現代の西側諸国の自由市民も皆こう言うことができるのだと「ワタシは ベルリンシミンである」と。

講評

ドイツ語と日本語のように異質な言語を翻訳する場合、訳文が原文に密着しすぎると、分かりにくくなってしまふことがあります。最優秀作品は、原文をほぼ正確に踏まえつつも、原文と適度な距離を置くことによって、大変読みやすい訳文を実現していることが高く評価されました。他のどの応募作品よりもすらすら読むことができ、内容がすんなりと頭に入ります。英語なまりのドイツ語をカタカナ表記したのも、良い工夫でした。その反面、原文への忠実さという点に関しては、多少注文を付けたい箇所もあります。「ファウストからある一節を引用した（→『ファウスト』の箴言を見つけ出した）」「ベルリン市民の期待に言葉で応えることにしたのである（→ベルリン市民が聞きたがっていることを聞かせた）」等の訳文は、原文から離れすぎているように思いますし、「（ケネディーは）訴えた（→こだわった、強く求めた）」「アメリカ人のベルリン司令官（→アメリカ軍駐西ベルリン部隊司令官）」等の訳語はさらに検討してもらいたいところでした。

「読みやすい訳」と「正確な訳」はしばしば背反するものですが、翻訳をする場合は、できる限りその両立を目指したいものです。